
赤い糸

ランデブー

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

赤い糸

【Nコード】

N9322A

【作者名】

ランデブー

【あらすじ】

僕と妹の千佳はとても仲良し。でも、パパとママの赤い糸が切れちゃったから千佳とママとお別れなんだ。バイバイなんかしたくないから、僕と千佳は赤い糸をとりに行く事にしたんだ。

(前書き)

この作品は企画小説です。「九月の童話」と検索すれば、他の作者様の素晴らしい作品が見れます！それでは、お楽しみくださいませ
o (。 ^*)ノ

赤い糸

僕と妹はとても仲良し。手をつないだりおままごとをしたりプリクラを撮ったり一緒に風呂に入ったりキスなんかしちゃったりー皆からは、

「仲良過ぎるんじゃないの？」

って言われるけど、お互い大好きなんだからしょうがないじゃん！僕は千佳の事が好きだし、千佳は僕の事が好きだしね。

でも、大好きな千佳ともうすぐお別れになっちゃうんだ。パパとママを繋いでいた赤い糸が、切れちゃったんだって。だからお別れなんだ。また新しい赤い糸を買ったらいいのに、パパもママも買わないんだ！赤い糸が無いから、バイバイしなきゃイケない。ママと千佳と、バイバイしなきゃイケない……。

「ぐすつ……ぐすつ……」

千佳はいつも声を出さずに泣いている。家族がバラバラになっちゃうから、悲しいのかな？

だから僕はいつも、

「千佳。涙をこのハンカチで拭いて」

千佳を勇気づけるんだ。

「お兄ちゃん……ぐすつ……ありがとう」

ニコリと笑い、僕に抱きついてきた。

「元気になって良かった」

僕はホッとして溜息をついた。しかし、

「ぐすつ……ぐすつ……」

また泣いてしまった。

そうか。あと十分で、千佳はママと一緒にこの家を出ていくんだ。

どうしよう？ このままじゃ、千佳が遠くに行ってしまう。

僕は何かないかなあと、部屋を見渡した。

すると、勉強机の上に置いてある目覚まし時計が、光ったように見えた。

「気のせいかなあ？」

そう呟いた僕は千佳の頭を優しく撫でて、目覚まし時計を右手で持った。

「お兄ちゃん、何してるの？ 電池ないの？」

千佳は真つ赤になった目で、僕の隣に歩いてきた。

「気のせいだと思うけど、この目覚まし時計がさっき光ったんだよね」

「えっ？ ソレほんと？」

「気のせいだと思うけど」

「もしほんとだったら、この目覚まし時計は『不思議な時計』だよ！」

「不思議な時計？」

「不思議な時計っていうのは、長針を動かすと過去に戻れたり未来へ行けたりするの！ 有名な話だけど、お兄ちゃん知らないの？」

「その話、本当なの？」

「それは分からない……」

「じゃあ調べてみよう！」

僕は裏側を自分の方に向けて、長針を少し動かした。目覚まし時計は、12時45分になった。

確認の為、壁掛け時計を見る。壁掛け時計は、12時45分と指していた。

赤い糸

「スゴいよ！ 私達、過去の世界に来ちゃった！」

「そうだね。五分前だけだね」

僕は、パパとママが仲直りするには赤い糸しかないと思い、千佳が生まれた頃まで長針を動かした。
1日で1周だから、1年だと365周、10年だと3650周……
疲れたけど、家族がバラバラにならない為だから我慢しよう！

10年前の僕の部屋はお婆ちゃんの部屋だった。建て替える前の家は覚えていないので、興味があったりする。しかし、誰かに見つかる前に赤い糸を探さないとイケないので、足音をたてずに進む。

『オギヤーオギヤー』

一階から、赤ちゃんの泣き声が聞こえてきた。

この泣き声は千佳かな？僕は泣き虫じゃないしね。

『はいはい、ミルクでちゅよ〜。もう圭太はお兄ちゃんなんだから、妹の千佳ちゃんより泣かないでね。妹より泣き虫のお兄ちゃんなんて、嫌われちゃうぞ〜』 10年前のママが言った。

泣き声は、僕だったようだ。何で今とは逆なんだろうと思った。今は千佳が泣き虫で、昔は僕が泣き虫……ひよっとして、僕の泣き虫が千佳に風邪のようにうつったのかな？

『オギヤーオギヤー』

また、僕の泣き声が聞こえてきた。多分だけど、妹の千佳にママがとられたと思って、泣いてるんだと思う。

赤い糸

『おいおい圭太。お前は長男だから妹を守ってあげないとイケないのに、このままじゃお前が妹に守られるかもしれないぞ？』

10年前のパパが言った。

「ねえねえ。何で、私が生まれた頃に来たの？」

千佳は、誰かにバレないように小さな声で話す。

「お婆ちゃんが言っていたんだ。パパとママが千佳が生まれた頃、赤い糸をお互いの小指に結んで幸せに暮らしていこうって決めたのを。昔のパパとママは、今と違って仲良しでしょ？ 多分、赤い糸で結ばれてるからだと思うんだ。だから、赤い糸をとりに来たんだ！」

僕も、誰かにバレないように小さな声で話す。

「じゃあ、早く赤い糸を見つけて2006年に帰ろう！」

「うん」

赤い糸は、パパとママの寝室にあった。

お婆ちゃんが言っていた通り、タンスの一番下に赤い糸はあった。

「よし！ 帰ろう」

僕は千佳の右手をギュッと握り、お婆ちゃんの部屋へと向かう。

一歩一歩慎重に歩く。

そして、お婆ちゃんの部屋につくと急いで目覚まし時計の長針を、10年後まで進めるー！。

目の前が眩しく光って、少しずつ視界が開ける。気がつくと、僕と千佳はベッドの上に横になっていた。

赤い糸

「戻ってきたんだ。2006年に……」

「そつだね」

僕は右手に持っている赤い糸を強く握って、千佳の頭を優しく撫でる。

「圭太！ 千佳！ 何処に行つたんだ！」

一階から、お父さんの大きな声が聞こえてきた。僕達を探してるみたい。

「二人とも！ 隠れてないで出てきなさい！」

今度は、お母さんの大きな声が聞こえてきた。

僕は時計を見たー！。

1時20分と指している。

「過去や未来に行っている時間だけ、現代の時間も進むんだつた…」

千佳は言う。

「かえつてこの状況は僕達に有利になつたと思うよ」「僕は言う。」

一階に降りた僕達。

「今まで何処に行つてたんだ？ お前達が突然いなくなったから、心配したじゃないか！」
「よかつた……二人とも無事で。二人が何処かに行つたと思つて、心配したのよ……」

パパもママも、僕と千佳の事を心配している。

「さあ、二人が見つかつたしそろそろお別れだ。圭太、千佳にバイバイをしなさい。千佳、ママの言う事をよく聞くように」
「千佳、荷物を持つてね。パパと圭太とお別れだから、ハグでもしなさい。それと圭太は、パパの言う事をちゃんと聞きなさいよ」

でも、パパとママの赤い糸は切れちゃつてる。

僕達の気持ちをちゃんとパパとママに伝えないと、アトで後悔すると思うから言つただけ言つてみるんだ！

「嫌だよ！ 千佳とママとお別れなんて嫌だよ！」
「お兄ちゃんとパパと、バイバイなんかしたくない」

「何言つてるんだ？ もう離婚したんだぞ」
「悲しいかもしれないけど二度と会えないわけじゃないから、分かつてくれない？」

二人の言っている事なんて耳には入ってこなくて、僕と千佳はパパとママの小指に赤い糸を結んだ。

「……コレって」

「あの赤い糸？」

パパとママは、暫らく無言のまま見つめあった。

そして、二人は声を出さずに泣きだした。

涙をフローリングの床にポタポタと落とし、泣いている、

「その……ゴメンな。怒鳴ったりして」

「私も、ぶったりしてごめんなさい」

二人の距離は、少しずつ近くなる。

赤い糸はピンと張っていたが、少しずつたるむ。

「わっ！」

僕は、目をつむった。

「パパとママ、ラブラブであ〜」

千佳は、楽しんでいる。

パパとママは、仲直りのキスをしているー！。

(後書き)

最後まで読んでくれて、ありがとうございますゴザイマスm)——(m 童話つていうのが結局何かが分からないまま、書きました。僕は童話とは、「子供でも読める読み物」と思っています。なので難しい文字は使いませんでした。よければ、御感想を書いてくれませんか？後書きまで読んで頂いたので。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9322a/>

赤い糸

2009年6月15日22時00分発行